

唱にあり募集されたものと記憶してあります。それは決して強制的では
なかつた。嫌な形自由には沖縄本島へ疎開も出来た。従って応募され
た方々は真に殉国の純情に燃えて決死の覚悟が島に留った方々と
信に専ら。その旨も申して置きました。然し又軍としては例へば衛生兵
が非常に不足して、之れを援助する人手を欲してゐた。又軍の炊事
等の使役にも人手を要したので前記の如く軍が提唱して募集したので
軍服は支給してなかつたが、事實は軍人と何等異なるところがなかつた旨
を申してあります。

勝敗河を異にして日本が勝つて居ましたら、此等の方々は今頃何の
様に全国民から崇められ、御遺族の比白様も今の如き窮境には居
られたいものかと考へます。誠に此誠心の言葉も御座りません。
今も眼を閉じますれば御令嬢や眞栄田様御令嬢を始め多くの
若い方々の面影が瞳に浮かび、誠に断腸の感が致します。遂に謹んで
御冥福を祈るばかりで御座ります。

長々と要領を得ぬ事のみ書きましたが、何かの御参考にお役に立
てば幸に存じます。

御地は種々物資不足に苦しんでゐられる由ですが、どの様なものか最も必要
か、若し小遣お役に立ちうれば微力ながらさせて頂きます。
お暇の折には御近況お知らせ賜はれば幸甚に存じます。未筆な
がら旧知の方々に何卒宜しく御傳声の程も願上す。
寒さの折、御自愛を祈り上す。

戦斗能力に關し。指示。入。隊。一。等。隊。の。所。に。
九一〇。月。次。から。
一。等。隊。の。身。分。改。改。

伊江島に於ける義勇隊等の状況につきて

31. 6. 20

△少年義勇隊

一 編成等の状況

青年学校の生徒を以つて編成。昭19年8月頃当時伊江島の
守備隊長であった西村少佐が青年学校に訪れ「防衛召集
（適令外の者は軍属として採用し軍司令部に報告するから名
簿を作成して提出するよう命令された。学校当局は早速本
科生（平民学校高等科二年を修了したもの）を当時16才、17才）
全員（20名位）名簿に登記し提出した。

その頃かうボツく本島の疎開が始められたが6才以下15才以上の者
はこれを許さず兵隊が波止場をこれを監視していた。

青年学校の生徒は授業は日課の1/3程度で殆んど戦斗教

練と築城作業に使役されていた。

二、編成及び教育

昭和20年1月下旬頃、伊江小民学校に於いて編成。当日被服の支給を受け、編成式の翌日から井川隊諸江隊の准尉(氏名不明)を教育係官として、部下に係として伊江島出身の既教育者、当時村の兵事主任内岡正有(兵長)玉成正徳、儀岡清正(青年学校)の訓道守)等を配置して訓練を開始。自覚から通いつつ、約三ヶ月間銃剣術及び急造爆雷の操作等の訓練を受け、堀と築城作業もせしめられたが主として戦術訓練であった。

三、米軍上陸後

4月1日から2日頃、米軍から各自認識書を渡され、各中隊、小隊

分隊に次々配属された。(人員の配置は同一部落出身者をグループとしてなされた)。その際、隊長(井川)は「これから君達も兵隊と共に戦う事をすることになるが死ぬ覚悟のない者は、今の中に帰って来れ」と訓辞していた。その旨は帰宅を許さず兵隊と共に兵営内の生活であった。

配属以後の訓練は同様に行われたが、更に夜間交替制による海岸線の巡察の任務も課され、その他歩哨に立たせられたり米軍上陸に備え築城に従事。

4月16日米軍伊江島上陸に伴い交戦状態に入り、地形に詳しいことを理由にむしろ最前戦に立たされ、時には「君達の島は君達が守るのだ」と斬込を強要された場合もある。

資料提供者 儀岡清正 比土加正明

△ 女子救護班

一、編成等の状況（少年義勇隊と同じ）

二、編成及び教育

昭和19年10月10日の空襲後以後、児玉軍医により一月中旬頃まで教育を受けたが人員は約100名位であった。

三、部隊配置

上級生の50名位が一月中旬頃から本格的看護教育を受け、三月中旬頃各隊の衛生係として、義勇隊と同林各隊に、三三名宛配置され、以後は軍医や衛生兵の指揮による看護業務に従事することとなり、他の者は婦人協力隊と共に筑城作業、若しくは作業の炊事等に従事していた。

四、上陸後の状況

4月10日頃女子救護班は髪を短く切り落し（戦斗帽を被ると男子同様な恰好となる）カバンを提げたま、弾薬運搬をはじめ衛生業務に従事していたが4月16日米軍上陸により西山へ移動、17日か18日頃急造爆雷を北へ負い、斬込敢行す。

次資料提供者 大城 ニゲ

△ 婦人協力班

婦人會の幼児のな、60才までの婦人を以て組織し義勇隊及び女子看護班の編成と同時に編成、これ等の者は終始築城作業及び炊事等に従事している。

一 集団自決の渡嘉敷戦

戦争は最大の悲劇であるが、それが無知と暴虐を伴うときは一層哀れである。沖繩戦に於ける渡嘉敷島の戦いは今なお悪夢のように私達の思い出をかきむしるのである。

鈴木部隊の駐屯

渡嘉敷村は那覇から約二十哩の沖にある離島で、渡嘉敷島と前島の二つの島からなっている。渡嘉敷島には渡嘉敷、阿波連の二つの部落、前島には前島の一部落があるだけである。那覇から月に一回発動機船の連絡船が通じ、昭和十五年の国勢調査では人口一三七七、在籍者三〇七、男五九五、女七八二となつてゐる。

島民は半農半漁で生計をたて、蕎麦、麦、籐蓆が主産物。壮丁の徴兵検査合格率は日本全国で第一位を占め、模範部落として知られてゐた。既に戦争は末期の様相を帯びてゐた昭和十九年九月二日、七千屯の汽船が慶良間海峡、阿佐港外に碇泊、これを目標に友軍機が盛に爆撃演出を始めていた。この船が何のためか碇泊してゐるのか住民の誰にもわからなかつた。

九月七日、沖繩憲兵隊の憲兵軍曹が突然来島、軍需部の漁撈班に漁船を徴用した。一三〇名と共に、続いて村営の連絡船嘉進丸も徴用された。九月九日、碇泊中の汽船から渡嘉志久に小型舟艇で陸軍の兵隊が続々とおくりこされ、聞けば、渡嘉敷駐屯の兵員一千名からなる鈴木部隊だといふ。基地隊である鈴木部隊は絶不村の国防婦人会を始め住民の歓迎をうけて渡嘉敷部落に到着した。

部隊の宿舎には住民の住家が提供された。翌日から直に陣地構築作業が始まつた。鈴木少佐の要請で男も女も、十六歳から六十歳までの匂けるものはすべて動員された。九月二十日、海上挺身隊が渡嘉敷と阿波連に駐屯した。これは兵員二〇〇名、每艇一〇隻、隊長は赤松大尉といつた。この船舶隊の訓練は秘密裡に行われていたようであった。

十 上空襲撃の日の渡嘉敷

十月十日——耳に響く異様な爆発音、空に高射砲の弾雲、たゞならぬ気配が感じられた。部落民は早速鈴木部隊に向い合はせると、反軍の対空演習だ。との返事に安心して陣地作業を続け、が、向もなくけるか上空の四機編隊の飛行機が急に機首を渡嘉敷に向い、低空からダダダと連続音をたてて機銃掃射を浴びせてきた。

空襲だ！
島は忽ち大混乱におちいった。どの家も留守宅は老人と子供だけ、学校では生徒の避難に先生はオロオロして気も顛倒せんばかりであった。敵機は機銃の外に小型爆弾を投下しつづつ何回も波状攻撃を加えてきた。船の被害が特に大きく、徴用船の嘉豊丸、源三丸、神拓丸、嘉進丸が被爆沈没して数名の死者を出した。

海上挺身隊遂に出撃せず

十月下旬頃、防衛隊として村民の中から七十九名が召集され、村の国民学校が兵舎にあつた。この頃になつて陣地構築も完了、舟艇は待避壕の中で出撃の日を待つかのようになつてあつた。昭和二十年二月下旬、鈴木部隊は整備中隊と通信隊の一部と赤松大尉と挺身隊を残して沖繩本島に移駐した。前後して水上勤務中隊と称する朝鮮人軍夫二〇〇名が南原中尉を隊長としてつづつてきた。

三月二十三日、今年にはいつての初の大空襲にあり、村役所、郵便局、国民学校が焼かれ、十名あまりの重傷者を出した。空襲は更に二十四、二十五日と続いた。敵機はガンソリンを撒いてから焼夷弾を落すといふやり方で、山林は火焔に包まれ民家も大半が焼かれた。二十五日未明、敵機は砲撃の連続射撃のもとに阿嘉島に上陸作戦を開始した。阿嘉島の海味には潜水艇を伴う敵艦隊が侵入して、赤松大尉も驚かされて、午後十一時頃、彼の

口から「出撃準備」の命令が発せられた。命令一下防衛隊員七〇余名、男女青年団員一〇〇名、壮年団員三〇名、婦人会員四〇名が艦艇の下をくぐつて必死となつて協力、舟艇百隻が待避壕から引き出され、海岸に今やその勇姿を並べた。

若い特幹隊員に、自爆は既に覚悟の上である。艦に飛び乗つてエンジンを開始、出撃合図を今や屋しと待ちうけていた。防衛隊の新城信平上等兵以下八名は機銃を据えて砲撃射撃の態勢をとつた。

心臓の鼓動のように時刻が刻々と過ぎていった。出撃の合図はまだない。あめ、遂に東の空が白みかかった。夜が明ければ万事休す。隊員はあせりにあせつた。一方、赤松隊長はこともあろうに壕の奥に待避して、既に戦闘意識を失つていた。

夜が明けてしまった。出撃の時機は夜空の星と共に去つてしまった。乗組員はあまりのことと憤然とした。丁俺達は何のために訓練してきたのだ。死なば諸共にと誓つたこの艇をどうして壊すことができないか。

然し命令には従わざるを得ない。涙をのんで艇を破壊した。が、中にはひそかに出撃するつもりで残しておいた艇もあるが、それも朝の空襲で残らず破壊されてしまった。百隻の舟艇を持つた船艇隊は、住民の期待に背き一隻の出撃もせず、一発の魚雷も発射することもなく味方の手で葬られてしまったのである。

陸軍士官学校出、二十八歳の赤松大尉に「昇法者」の罵声が浴せられたのは当然である。

追われる住民

三月二十六日、米軍は水陸両用戦車で渡嘉敷久、阿波連から上陸してきた。赤松隊はこれを迎撃することもなく無血占領された。赤松隊は自己の待避にのみ汲々として、あれほど軍に協力した住民をかえりみようとしない。三月二十七日——住民は西山の陣地北方の盆地に集結せよとの命令が赤松大尉から駐在巡查安里喜順を通じて発せられた。

安全地帯は、もはや軍の壕陣地しかない。盆地に集合することは死線に身をさらすことになる。だが所詮軍命なのだ。その夜はすさまじい豪雨の夜であった。一寸先もわからぬ暗闇で、ふじんからハブで恐れられて、親は子を背負い、手を引き、老人は助けられながら、砲弾のうなりの中を、泥濘にころびながら互に励ましあつて目的地に一步一步進んだ。見失つた子供を呼ぶ親の叫び声も一しお哀れであつた。死を意味する軍命にまで苦勞して従わなければならぬのだろうか。住民の胸には求むべき光は何もなかつた。西山の軍陣地に辿りついてホツとするいとまもなく赤松大尉から「住民は陣地外に去れ」との命令をうけて三月二十八日午前十時頃、泣くにも泣けない気持ちで北方の盆地に移動集結したのであつた。その頃には米軍は既に日本軍陣地北方百米の高地に陣陣、迫撃砲を撃ちだしてゐた。

集団自決

敵の砲弾は的確にこの盆地にも炸裂し始めた。友軍は住民を砲弾の餌食にさせて、何ら保護の措置を講じようとしなればかりか？住民は集団自決せよ！と赤松大尉から命令が発せられた。自信を失ひ、負け戦を覚悟した軍は、住民を道づれにして一戦を交へ花々しく玉砕するつもりだろうか。この朝に及んで部落民は誰も命は惜しくはなかつた。敵弾が倒れるよりいさぎよく自決した方がいいと皆思つた。場所を求めて、反軍陣地から三〇〇米の地点に約一五〇〇名が集結した。防衛隊員は二個ずつ手榴弾を持つていたのをごそれで死ぬことに決めた。一個の手榴弾のまわりに三三十名が丸くなつた。天皇陛下バンザイ！バンザイ！叫びが手榴弾の炸裂でかき消された。肉片がとび散り、谷間の流れが血で彩られていつた。中には、死にきれずに鍬や棍棒で相手の頭を撲りつけ、剃刀で自分の喉をきり切つて死んでゆくものもあつた。

こうして三二九名が自決して果てた。平和な時代には、美しい琉球鹿が水呑みに姿を現わしたというこの盆地も、恨みの盆地として村民は今でも「玉砕場」と呼んでゐる。自決の際、手榴弾の不発で死ななかつた者は、一団となつて軍陣地におしよせた。最後の保護を仰ぐ為であつた。だがそれにもなほおつけられてしまつた。「死にそこないの貴様達にかまつておられるものか、さつさと帰れ！」赤松大尉は壕の入口に立ちどかり恐ろしい形相で一団を睨みつけた。一同は返す言葉もなくさつさと元の場所へひきかえした。敵砲弾は容赦なくこの盆地に射ちこまれ、二十九日には住民三三名、防衛隊員数名がその犠牲となつた。

住民を惨殺

三十一日、米軍は戦隊の一部と宣撫班を残して渡嘉敷を撤退した。日本軍の兵力の弱少をみてトリ沖繩本島上陸作戦に参加するためであつた。空襲と砲撃が止んだ。生き残つた住民は、静かになつた空を仰いだ。まるで放心したように、食物らしい食物もとらず、死線をさまよつた五日間——空腹と疲勞で歩けない者もあつた。(そうだ、前に避難した恩納河原に行こう。あそこにはまだ食糧が残つてゐるかもしれぬ……)期せずして皆そう思つた。赤松大尉は敵が撤退すると、急に活発になつて「戦はいよいよ持久戦に入つた。残つた者は死んだつもりで軍に協力せよ」と、勝手極まる要求を住民に押しつけた。更に彼は家畜屠殺禁止の命令を出した。この監視には特に多里少尉が任命され、違反者は銃殺に処すという苛酷極まるものであつた。一片の藪、一本の野菜すら軍の許可がいり、谷間の清水も自由に飲めず、山藜や雑草まで食べて飢をしのいだが、老人や子供が栄養失調で先ず倒れていつた。住民の一人座間味盛和はなぜかスパイの疑ひがかけられた。身に覚えのないことで、軍の奸策に遭ひなかつたが、その無実を唱へる方法もなく、座間味は多里少尉の在つた日本刀

で処刑された。それだけにとどまらなかつた。家族の全部を失ひ、悲嘆のあまり山中をさまよつていた古波蔵も、スパイのおそれがあるという理由で高橋伍長の軍刀で殺された。住民は生きるために食糧を野良犬のように探しまわつた。蘇鉄や野草を食べ、水船が捨て、海岸に漂着した肉片や果物などをたまたま手に入れて露命をつないだ。そんななかでも、軍は朝鮮人軍夫をつかつて住民から食糧を徴発しようと血眼になつていたのだ。

四月が過ぎ五月——食糧難は言語に絶し、栄養失調者が続々と出てくるようになった。海峡には敵の飛行艇、駆逐艦、小型空母が碇泊し、無数の船舶が悠々と遊んでゐるのが憎らしかつた。時折、日本の特攻機が勇敢に突つこんでゆくのをかたずきをのんで見まもつたが、徒らに対空砲火の餌食となるばかりであつた。

三宅少佐の脱出

座間味島から渡嘉敷に逃れてきていた三宅少佐は、ひそかに沖繩本島への脱出の機会を狙つていた。剽舟で脱出以外には方法がないので、防衛隊の中から経験のある糸満漁夫の小嶺賢牛、玉城定天を選んで、二人に剽舟を漕がせることにした。敵中を剽舟で突破することは決死行であり、軍命である以上、ことわることもできなかった。

三宅少佐の他に軍人三名、漕手とも計五名を乗せた剽舟は暗夜に乗じて渡嘉敷港をばたき、敵の警備船を巧みにくぐり抜けて途中前島に立ちよつた。前島には住民は誰一人も留つていない。他に連れて行かれたのだからか。一日をこつて身をみそめ、日が暮れるのを待つて間の中を漕いで行つた。しかし掃海艇の警戒が厳重でどうしても脱け出すことができなかった。三宅少佐はことこの不首尾に烈火のように怒つて、一たん前島に引きかえした。

「意気地なしめ！貴様等の気合が抜けてゐるからだ！」

「成功するまでは慎重に何回でもやり直さなければ大死するだけです！」

「何と小しやくな！」

少佐は軍刀に手をかけてつめよつた。斬りたければ斬れと言わんばかりに二人は落ちつきはらつてゐた。

少佐は黙つて軍刀をひっこめた。二人を殺せば剽舟は誰が漕く——そう思うと嫌が応でも軍刀を引つこめざるを得なかつたのだ。

剽舟はひそかに前島をばなれた。小嶺、玉城の二人は今夜失敗すればすべてが終りだと思つて決めていた。

敵船の横腹を幾度もくぐり抜けた。スクリエーの渦にともすれば捲きこまれそうになつたが、必死の力漕で奇蹟的に神山島の北方に出ることができた。本島の邪覇は真近に迫つてゐるが、敵の掃海艇をくぐることは不可能であつた。そこで方向を変えて糸満に向つた。部隊本部があつた。

暴兵！赤松部隊

五月初旬、渡嘉敷は再び米軍の手にわたつた。敵は至るところの高地に砲陣地を築いて赤松部隊の根拠を全削してゐた。

その頃から食糧難にあえぐ赤松部隊は、食糧を得るためには背に腹は代えられず夜かくると、斬り込みと称して、米軍の食糧集積所を巧みに襲撃し始めた。

鈴木、小松原の両少尉はこの斬り込みで、敵の埋設した地雷に触れて最後を遂げた。

渡嘉敷には既に伊江島の住民が移されて米軍の保護をうけていた。

米軍は何とかして赤松部隊の無駄な抵抗を止めさせて投降させようと努めていたが、その勧告のため使者を出すことにになり、伊江島の住民の中から青年男女六名が選出され、使者の役を言いつけられた。

使者六名は一回に励まされて出発した。住民達はその無事を一心に祈りながら、帰りを今か今かと待つてゐた。不安のうちには時が刻々と過ぎてゆく……ああ遂に使者は一人も帰つてこなかつた。

それこそそのはず、赤松部隊に到着して未意を告げた使者は、「馬鹿野郎！」の一喝を浴びて、赤松大尉の軍刀の錆と消えたのであつた。

集団自決の時に傷を負ひ米軍に収容され手当てを受けた小嶺武則、金城幸二郎（共に十六歳）少年は米軍の言いつけで、西山に待避する渡嘉敷住民に下山勧告の役目を持つた、手を

振つて元氣を出ていった。
この二少年も途中で赤松部隊の兵隊に捕えられ、少年の説明も聞かされ入れられず処刑されてしまった。
赤松隊の暴虐は更につづいた。渡嘉敷小学校訓導大城徳守もスパイの嫌疑で惨殺されてしまった。
どこまでも哀れを極めたのは渡嘉敷の住民であった。食べるにもめなく、下山しようにも下山できず、ただ死を待つばかりのど、ん端に追いやうれていた。
八月十二日、食糧を求めて谷向をさまよっていた住民十五名が、米軍斥候四十余名に発見され収容される身となった。その中には妻を失い、幼児二名を連れていた郵便局長徳平秀雄もまじっていた。

最後の軍使

八月十五日、米軍後から赤松隊陣地に勅告ピラが投下された。ピラにはボツタム宣言の要旨と「降伏は最後まで勇敢にたたかわれた将兵のとるべき賢明な處である」との意味が書かれてあった。
ピラは住民の避難所にも舞い落ちてきた。村長の古波蔵等は住民を疎う方法はこれ以外にはないとし、遂に集団投降の断を下した。住民は重臣は足を引きずり、励ましあつて続々と山を下った。
赤松隊は勅告に恋じようとしなかつた。米軍側では又々軍使をやることに決めて、新垣重吉、古波蔵、利根、与那嶺徳、大城牛の四名が選出された。今までの例もあり見つかれば命が危いことは誰もよく知つていたが、皇軍を見殺しにするには忍びず、四名は赤松隊を救いた。一愈から勇敢にもこれを見守り、皇軍を待たせ、四名は赤松隊を救いた。古波蔵は皇軍生活の経験があり、勅告文を木の枝に結んで帰つてきたが、与那嶺、大城の二人は赤松隊に捕えられ殺されてしまった。二人の胸中には、さぞや無念やうかたないものがあつたことだろうか。

赤松隊投降す

勅告ピラがばらまかれてから三日目の八月十八日、赤松隊の知念副官が米軍のもとに

軍使として投降の交渉にやつてきた。

翌十九日には隊長赤松大尉が米軍本部を訪ねて降伏文に調印、二十二日には西村大尉の引率で赤松隊全將兵二〇〇名が山を下り、戦死した将兵の遺骨を先頭に渡嘉敷校々庭に集合、武装解除をうけた。
あれほど自分の口で玉砕を叫びながら、自らは壕の中に避難して住民には集団自決を命令、あるいはスパイの濡衣をかぶせて斬殺、暴虐の限りをつくした彼、赤松大尉は今や平然として降伏文に調印し、恥じる色もなく住民の前にその大きな面を現わしたのだ。その態度はあくまで傲岸で、すこしも自省の様子は見られなかつた。その彼が武装解除され、皇軍の襟度も何もなく捕虜となり、米軍兵士に連れて行かれる姿を、住民たちは複雑な気持ちで凝視していた。
昭和二十年八月二十三日、渡嘉敷戦はその幕を閉じた。
沖縄本島の降伏後の一カ月目であった。

佐藤小隊の最後

この記録の末尾に「佐藤小隊」のことを附記した。
悪名を轟かせた赤松隊の中の佐藤小隊だけは、皇軍の名にふさわしく花々しい最後を飾つた。即ち、三月二十七日、渡嘉敷の道路上で米軍と遭遇した佐藤小隊は、寡兵よく戦いつづけたが優勢な敵には抗しきれず、伊芸山頂で全員壮烈な戦死を遂げた。その功績は永遠に渡嘉敷住民の心に残るだろう。

渡嘉敷島における兵力及び損耗数

所任部隊	兵員数
海上挺進中三戦隊、隊長赤松大尉	二〇〇名
海上挺進中三大隊、隊長鈴木少佐	二〇〇名
朝鮮軍夫	六〇〇名

戦没者概数
軍人軍属
夫

住民の自決救

約	二五〇名
計約	一五〇名
計	四〇〇名
	三二九名

二 座間味住民の集団自決

那覇の海岸に立って、西の方を眺める。水平線上に島影が見える。慶良間と呼ばれる島々だ。慶良間諸島は座間味、渡嘉敷の二村即ち座間味、渡嘉敷、座間味、慶良間、屋嘉部、その他の小島からなり、那覇の西方約二十哩、発動機船でおよそ三時間の距離に点在している。座間味村は当時人口約二千三百余人で、島民は半農半漁を営み鐘節の名産地であった。渡嘉敷、座間味の両村は沖繩戦でおおきな悲劇を経験した。即ち「集団自決」というおそろしい要求が、敵側からではなく我軍からなされたのだ。しかもいささかの反抗もみせず、自決は祖国の勝利のためだという素朴な信念のもとに、村民の中一五五名が非業の死を遂げたのである。

昭和十九年九月十日、慶良間諸島の座間味村を守備するために梅沢少佐の率いる、約一〇〇名の陸軍部隊が来島。座間味に本部を置き阿嘉、慶良間等の島々にも駐屯した。あつたはだしく陣地の構築、弾薬倉庫の建設がはじまり住民は全力をあげてこれに協力した。昭和二十年三月二十三日、座間味は米軍の攻撃を受け、部隊が全滅するほどの被害を蒙り、住民から二十三人の死者を出した。村民たちは、残跡に立って呆然とした。早速、避難の壕生活が始まった。その翌日も朝から部隊や軍事施設に執拗な攻撃が加えられ、夕刻から艦砲射撃が始まった。艦砲のめとは上陸だ、住民がおそろいのいているとき、梅沢少佐から突然、次のような命令が発せられた。

「切き得る者は男女を問わず、戦場に参加せよ。老人、子供は全員、村の忠魂碑前で自決せよ」

と。然も、未だ敵は上陸せず一戦も交えない中である。従順な住民たちは老人も子供も晴れ着で死装束をして、続々と集り、忠魂碑前は村民で埋った。梅沢少佐と村長が現われるとき、自決は決行されることになった。村民たちは刻々と迫る、その時刻を待った。一家眷族、そして村中の老幼が寄り合って、自から己の生命を絶とうとしている。この死が、戦争に勝つためと信じて疑わない住民の群は、おそろしい程の平静を保っている。命が、いや、はりつめた緊張の中の平静さだった。たかもし知れない。そのとき、艦砲が忠魂碑に命中、碑は轟音とともに破壊された。瞬間、この轟音が生への覚醒になり、誰かが立ちあがってかけ出すと、全員が回散した。

こうして、ひとつの悲劇は防くことができたが住民の自決は、このあとつぎつぎに起ったのだ。

島は、敵艦艇に取り囲まれ、戦艦、空母の大型から小艦艇とギッシリ海面を埋めていた。二十六日午前十時、物凄く掩護射撃の下に上陸が始まった。味方の陣地は次々に吹き飛ばされてゆく。日本軍は、全軍「番所山」に集結した。夜になつて、一部落に敵兵が密集している。

と。いふ報告がもたらされ、即刻、斬込隊が編成された。この斬込隊の出発と共に、小嶺つる子外四名の女子青年団員に、重要命令が下された。この斬込隊の出発と共に、小嶺つる子の生母は、今夜稲崎山に集合するから、お前たちは弾薬をこれから指定する場所へ運ぶようにせよ。

と、弾薬箱と手榴弾が渡された。この弾薬箱は、普段なら女の細腕ではどうにもならぬ重たいものであった。彼女たちは、それを背負って齒を喰ひしはり、険しい道を難不の繁茂した山をふみわけ、午前四時頃、ようやく目的地に着いた。

しなれば、予定の時刻になつても斬込隊の将兵は姿を見せなかった。夜明け前までに集合しなれば、彼女たちは、不安と焦燥感にとらわれた。次第に夜が明け放れたが、遂に一人も帰らなかつた。生きて辱しめを受け、敵に包囲され、最早、最後の決意を決めた。ままだ死のうと、五人の乙女たちは悲壮にも最後の決心をした。潔く汚れのないう体の静かな山に不気味な爆発音がこだました。乙女たちが自らの命を絶つ手榴弾の音であつた。

た村役場三役の自決もその日であった。その外、軍刀と家族全員を刺し殺したり、天皇陛下万歳を叫んで唾吐酸、小刀、カミソリ、手榴弾などで親子、兄弟姉妹、そして親しい者同志がお互の血を浴びて倒れた。梅沢少佐の自決命令を純朴な住民たちは、そのまゝ実行したのである。その日、七五名が自決し多くの未遂者を出した。

一方、住民の大半は島の西北端にある俗称「ヌンルガマール」の自然壕に集つていた。この壕は入口にアダン葉が生い繁り、奥行ハの米位の壕であつたが、海岸に入口が開けてあるため、敵艦とはわずかにこのアダン葉が隠蔽物になつてはいるにすぎなかつた。ここにぎうしりつまつた三百余人の住民は、息をこらして死の恐怖とたかつかつていた。物音ひとつたてることも出来ない。赤児が泣くと、親が周囲の視線におびえなかり、我が子の口に手拭をおしめてた。生来をかじつていゝ子供、眼だけが異様に光り、ただ吐息ばかりついでいる老人。食物もなく、水さえなかつた。中には小便をわが子にすすらす者もいた。声を出すものは、殺される。と、いゝおそろしい言ひ合せをそのまま肯定しなければならぬ最後の土壇場に迫りつめられていた。乳も出なくなり、子供が火のついたように泣くと周囲から、「敵に発見されるぞ！ 殺せ！」と、悪魔のような罵声が飛んだ。それに耐えられなくなり、砲火の荒狂うなかへ次々と壕を出て行った。あとには栄養失調で氣力を失つた者だけが残つた。

同村の阿嘉島には、古賀少佐の率いる九百の設営隊と野田少佐の率いる特幹隊四百が駐屯していた。国民学校高等科生を含む義勇隊八〇名も野田部隊に編入された。古賀、野田の両部隊は三月十四日、斬込隊を編成した。この中には高等科の生徒もまじつていた。わずかに十四、五歳の少年たちが大人にまじつて、むしろ喜々として最後の死闘をした。二十七日未明、古賀部隊は海岸の米軍陣地、野田部隊は各部若の米軍に斬込みを敢行した。不意を打たれた米軍は忽ち混乱におちいつたが、猛烈な反撃に出て彼校の周にすさまじい肉迫戦がはじまつた。しかし、斬込隊は米軍の敷設地雷に接触し、殆んどが全滅。生き残つた者も、目の前に群がる米軍の中に斬込み全員が戦死を遂げた。

その日の午後十一時、オ二回目の斬込を海岸線の米軍に敢行、この攻撃は、猛烈な復讐、さしもの米軍も算を乱して敗走、船舶に退却せざるを得なかつた。阿嘉島の古賀部隊は、このように猛烈な斬込みを繰返してはいたが、ついに玉砕を決意、住民に対して速かに自決するよう手榴弾をくばつた。しかし、手榴弾一個では一家一族の自決は出来ず、傷つて苦しむ者も見るに忍びず我が子を、あるいは親を鎌やカミノリで殺すという悲惨な場面が展開された。神凡特攻隊も未成したが戦局を挽回するだけの力はなかつた。次々に食糧が欠乏し、遂に軍は住民に対して「芋や野菜の少しでも、軍の許可を受けずして採取する者は銃殺する」という厳命を下された。年寄や子供は次々に倒れていった。兵士も、雑糞などに米粒を発見されると十日間の絶食又は銃殺という厳命だつた。三十名がその為に銃殺された。兵も民も落を食つて露命をつないだ。水でさえ自由に飲めなかつた。阿嘉島は米軍にとつて攻略困難な島となつた。いゝうな宣撫工作がさかんに行われたが、日本軍の作業人たちが米軍宣伝隊に捕えられたが、彼等によつて六月十五日に米軍からの降伏勧告がもたらされた。期限の二十五日、野田少佐は生存者全員に集合を命じ、最後の訓辭をおこなつた。降伏せず！ 最後の一兵まで闘え！ これが、米軍への回答だつた。

沖繩戦は六月二十二日に軍司令官牛島中将の自決によつて終焉した。しかし、阿嘉島の抵抗は八月までつづき、日本が正式に降伏した八月十八日におくれること、一周阿嘉島の月二十三日遂に白旗をかかげた。

座間味村における戦死概数

座間味島

三〇〇名

⑦

阿嘉島
計
住民の自決

二〇〇〇名
五〇〇〇名
二八四名

沖繩戦斗参加者該否一覽表

昭三
未帰還
選調
査部

区	分	人員数	備考
該	当	予	定
	者	36,263	
	滿	11,058	
保	7	5	才
	以	383	上
	照	236	戦病死および 2/1年以降戦傷死
	戦	130	地指定前死亡
	戦	238	地指定外死亡
留	そ	45	他の
	計	12,090	
	再	139	調返却
	時	3	効返却
	非	14	該当
	合	48,509	計

沖野丸下合三

昭 35. 4. 12 昭 35. 4. 12 未帰還調査部

満 14才未満戦闘参加，保留（該当予定）者一覽表

区分	一 区 分											合 計	
	射	保護者と運命を共にした者	四散部隊への協力	食糧提供	自決	壕提供	伝令	患者輸送	炊事雑役救護	道案内	陣地構築		糧秣運搬
13才	2		19	19	28	676	(3)	(3)	(92)	(3)	(52)	(61)	(49)
12才			9	9	15	566	(2)		(32)	(3)	(9)	(13)	(4)
11才	4		6	5	579				(14)	(1)	(6)	(13)	(4)
10才	1	1	10	5	611			(10)	(10)	(1)	(5)	(9)	(1)
9才	1	1	6	1	625				(7)		(4)	(15)	0
8才		3	10	5	686				(6)		(9)	(9)	0
7才		5	8	5	708				(7)		(7)	(7)	0
6才		1	9	3	689				(2)				5
5才	1	6	15	3	799								2
4才		9	12	3	950				1				
3才		17	18	2	966								
2才	1	32	11	10	1158								
1才	3	21	15	6	920								
0才	1	4	2		168								
計	14	100	150	76	10101	(5)	(3)	(169)	(8)	(57)	(125)	(58)	31

備考 本表は受付総件数 48,509 件について調査分類したものである。

宮古八重山郡島における戦斗参加協力別表

昭 35. 4. 13. 末 帰 還 調 査 部 冲 縄 班

協力内容	昭 19 年	昭 20 年							計	備 考
		2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月		
陣地構築				4		4			9	
炊事継続			1	4	1	7			13	
食糧運搬				4	2	4			10	
演習勤務	2			1	2				5	
飛行場作業				1	3		1		6	
壕提供					1	2			3	
警報伝達			1	2					3	
馬糞蒐集					1	1			2	
道路構築		1							1	
戦車壕掘				1			1	1	3	
取 域					1	1		1	3	
合 計	3	1	2	17	11	19	2	3	58	

